

俳人の種田山頭火たねださんとうかの句に・・・

「この道しかない春の雪ふる」 があります。

托鉢しながら歩むと決めた道の先を雪が降り積もって消して行く、不安になりそうな心と決めた道を歩もうとする心の葛藤が融けかかった春の雪の隙間から窺うかがえそうな、象徴的な俳句です。

又、日本画の巨匠、東山魁夷ひがしやまかいの代表作に「道」があります。青い草原の真ん中に太い一本の白い道が描かれているものですが、これは戦前に青森県八戸市の種差海岸たねさしでスケッチしたものに、戦後の復興の願いなどを重ね合わせた心象風景画といわれています。目の前の一本道にこれだけ強く心を惹かれるのは、人生に何かしらよりどころを求めからではないでしょうか。

道というと、自分自身の人生の歩みと重ね合わせることが多いようです。幼少期であれば、これから先の人生は生まれてからの年月とは比べ物にならない長さであり、歩む道も想像が付きにくいものです。これが年月を重ねると、振り返ることが段々と多くなります。これまで歩んで来た一本の人生の道に、苦勞を感じたり、時に後悔しながらも進んで来たことを度々思い出す様になっているのでしょう。

今年は多くの災害がありました。その中には多くの人々の助け合いの姿がありました。私たちが歩んできた道を振り返ると、一人で歩んで来たのではなく、多くのお蔭を頂いて生かされてきたことに改めて気付かされます。多くの人に感謝の念を深くして、これからも沢山のご縁に出会いながら道を歩んでいきたいものです。

道元禅師が詠まれた和歌を集めた『傘松道詠集』さんしょうどうえいしゅうというものがあります。

その中に・・・

「いたづらに過す月日は多けれど道をもとむる時ぞすくなき」という御歌おうたがあります。

これは歳を重ねた者にとっては重みのある戒めの言葉ともとれるでしょう。ここでいう道とは仏道修行の道、お釈迦様のお悟りに向かって、心の迷いを離れて安らぎの中で生きていこうとする道です。修行の日々の中にあって発心ほっしんを忘れてはならないというお示しでもあります。

『 禅のこころ - 曹洞宗 - 』

これからも、お釈迦様から道元禅師に伝えてこられた教えをよりどころとして、ご縁の大切さをかみしめながら日々を過ごして行きたいものです。

— 終 —